



TITLE:

魏・晉詩における「夕日」について

AUTHOR(S):

森, 博行

---

CITATION:

森, 博行. 魏・晉詩における「夕日」について. 中國文學報 1975, 25: 11-32

ISSUE DATE:

1975-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177306>

RIGHT:

魏・晉詩における「夕日」について

森 博 行  
京都 大學

ついで、『毛詩』によって調べてみると、例えば

其雨其雨 其れ雨ふれよ其れ雨ふれよというに

杲杲出日

杲杲として出づる日<sup>注①</sup>

(衛風・伯兮)

東方之日兮

東方の日よ

彼姝者子

彼の姝<sup>うるわ</sup>しき子<sup>ひと</sup>は

在我室兮

我が室に在り

(齊風・東方之日)

中國の詩に、熟語として「夕日」を意味する語が最も早く現われたものの一つは、三國時代の魏の徐幹の「情詩」(玉臺新詠卷一)と題する詩の次の句ではないかと思う。

微風起閨闥 微風 閨闥に起り

落日照階庭 落日 階庭を照らす

やあるいは

羔裘如膏

羔裘は膏の如く

日出有曜

日出でて曜<sup>かがや</sup>き有り

(檜風・羔裘)

きざはしの前庭を照らす「落日」が即ち「夕日」である。しからば、魏以前の詩においてはどうなっていたのであろう。

中國文學史上、今日までのところ最古といわれる詩經に

如月之恆

月の恆なるが如く

魏・晉詩における「夕日」について(森)

如日之升 日の升るが如し

(小雅・鹿鳴之什・天保)

などと、「朝日」がうたわれることはあっても、「夕日」がうたわれることは全然ない。

「鶏は時に棲り 日の夕なるままだに 牛と羊は下り来る」  
（王風・君子于役）と夕ぐれがうたわれても、「日の夕」の「日」は、sunではなくdayを意味し、「夕日」が詩の表面に登場することはない。又「其の夕陽を度れば 幽居允に荒いなり」（大雅・生民之什・公劉）という、この「夕陽」は、「毛傳」に「山の西を夕陽と曰う」と注されているように、やはり「夕日」ではない。

詩經の作者らは、「朝日」に對する關心を示しても、「夕日」に對する關心は、全く示さなかった如く感じられる。次に楚辭においてはどうかであろうか。楚辭の種々の作品群のうち、先ず「離騷」について調べてみると、

朝發軔於蒼梧兮

朝に軔を蒼梧に發し

夕余至乎縣圃

夕に余れは縣圃に至る

欲少留此靈瑣兮

少く此の靈瑣に留まらんと欲すれば

日忽忽其將暮

日は忽忽として其れ將に暮れんとす

吾令羲和弭節兮

吾は羲和をして節を弭め

望崦嵫而勿迫

崦嵫を望んで迫る勿からしむ

路曼曼其脩遠兮

路は曼曼として其れ脩遠なり

吾將上下而索

吾は將に上下して求索せんとす

という、太陽がだんだんと崦嵫の山（日の入る山―王逸注）に沈まんとするさまをうたう句をみることができると。更に、「離騷」以外の作品より、いくつか取り出してみると

白日晼晼其將入兮

白日晼晼として其れ將に入らんと

し

明月銷鑠而滅毀

明月銷鑠して滅毀す

歲忽忽而適盡兮

歲は忽忽として適り盡き

老冉冉而愈弛

老は冉冉として愈い弛む

(宋玉・九辯・其七)

日杳杳以西頽兮 日は杳杳として以て西に頽れ

路長遠而窘迫 路は長遠にして窘迫す

(劉向・九歎・遠逝)

日噉噉其西舍兮 日は噉噉として其れ西に舍らんとし

陽焮焮而復顧 陽は焮焮として復た顧みる

(同・九歎・遠游)

などである。

「離騷」を含めてこれらの句は、日が西に沈むということとをうたっているが、「日」や「白日」という語そのものは、無論「夕日」を意味しない。

楚辭中には、詩經とちがって、一見「夕日」に對する關心が現われているかのようにみうけられるが、その關心の所在は、「夕日」そのものにあるというより、既に小池一郎氏が『暮れる』ということ―古代詩の時間意識―(中

魏・晉詩における「夕日」について(森)

國文學報第二十四冊所收)と題する論文の中で考察されているように、むしろ日が「暮れる」ということにあったように思う。移行の相において太陽がうたわれることは、右に數例引用した通りであるが、熟語として「夕日」を意味する語が使用されることはないのである。

次に、楚辭以外の漢代の詩についてこれをみると、

日崔隤 日は崔隤し

時不再 時は再びならず

(廣川王去・歌二首・其二・樂府詩集卷八四)

曖曖白日 曖曖たる白日

引曜西傾 曜きを引いて西に傾く

(秦嘉・贈婦詩・玉臺新詠卷九)

などというのがある。これらの句が、太陽が西に没することとをうたっている、  
「日」、「白日」が「夕日」でないことは、楚辭の場合と同様である。

以上みた通り、魏以前の詩には、熟語として「夕日」を表わす語は現われないのであるが、この小論においては、「夕日」が、魏及び晉代の詩にどのようにとらえられ、うたわれているか、そしてそのことは一體如何なる意味をもつか、ということについて論じてみたい。

## 二

先ず、冒頭に示した徐幹の「情詩」の全文をみよう。

高殿鬱崇崇 高殿 鬱として崇崇たり  
廣厦淒泠泠 廣厦 淒として泠泠たり  
微風起閨闔 微風 閨闔に起り  
落日照階庭 落日 階庭を照らす  
峙嵒雲屋下 雲屋の下に峙嵒し  
嘯歌倚華楹 嘯歌して華楹に倚る  
君行殊不返 君行きて殊えて返らず  
我飾爲誰榮 我が飾り誰が爲にか榮んなる  
鑪薰闔不用 鑪薰 闔じて用いず

鏡匣上塵生	鏡匣 上に塵の生ず
綺羅失常色	綺羅 常色を失い
金翠暗無精	金翠 暗くして精無し
嘉肴既忘御	嘉肴 既に御するを忘れ
旨酒亦常停	旨酒 亦た常に停む
顧瞻空寂寂	顧瞻すれば空しく寂寂たり
惟聞燕雀聲	惟だ燕雀の聲を聞くのみ
憂思連相囑	憂思連に相囑り
中心如宿醒	中心 宿醒の如し

この詩を一讀して氣のつくことは、詩的結晶の純度は一應除外するとして、論理展開の明晰な詩的構成である。

開頭四句に場所的時間的狀況を設定し、次に、全體（高殿・廣厦）から部分（雲屋の下）への視線の移行によって女主人公を登場させ、續いて二句毎に、鑪薰―鏡匣、綺羅―金翠、嘉肴―旨酒という類似の物を、賦的な羅列・積み重ねによる敘述によって配置し、終聯に「憂思連に相囑り中心宿醒の如し」と、主人公の悲嘆で、この詩は結ばれ

ている。

この詩に、「建安の初めに暨びて、五言騰踊す。文帝・陳思は、轡を縦まにして節を馳せ、王・徐・應・劉は、路を望んで驅を爭う。——中略——懷い<sup>な</sup>を造し事を指すに、織密の巧を求めず、辭を驅せ貌を逐うに、唯だ昭晰の能を取る。此れ其の同じき所なり。」<sup>注③</sup>（文心雕龍・明詩篇、○點引用者）という劉勰の指摘をあてはめても、當を失してはいないであろう。

それはさておき、問題は「落日」の句である。これを考察する爲に、開頭の二句「高殿鬱として崇崇たり 廣厦淒として泠泠たり」についていささか説明を加えたい。『玉臺新詠』の注釋者である清の吳兆宜は、「高殿」「廣厦」の語に、それぞれ、宋玉の「神女賦」（文選卷十九）の

宜高殿以廣意兮

宜しく高殿にして以て意を廣うすべし

翼放縱而綽寬

翼として放縱して綽寬なり

動霧縠以徐歩兮

霧縠を動かして徐歩すれば

魏・晉詩における「夕日」について（森）

拂墀聲之珊珊

墀を拂う聲の珊珊たり

「列子・力命篇」の

北宮子既歸、衣其短褐有狐貉之溫、進其莪菰有稻粱之味、庇其蓬室若廣厦之蔭、乘其華輅若文軒之飾（北宮子既に歸り、其の短褐を衣て狐貉の溫有り、其の莪菰を進めて稻粱の味有り、其の蓬室に庇して廣厦の蔭の若く、其の華輅に乘りて文軒の飾りの若し）

というのを注している。「高殿」「高厦」の語それ自體の語義の解釋については、それで済むかも知れない。が、ここでは、趙飛燕姉妹の讒言の故に、成帝の寵愛を喪失し、その爲、太后の世話をすべく長信宮に退居して作ったといわれる班婕妤の「自傷悼賦」（漢書卷九七下・外戚傳）を想起すべきでないか。それは、次の如くである。

潛玄宮兮幽以清

玄宮に潛みて幽にして清なり

應門閉兮禁闔局

應門は閉じ 禁闔は局ざす

華殿塵兮玉階落

華殿は塵おき 玉階は落おちむし

中庭萋兮綠草生

中庭は萋として綠草生うず

廣室陰兮帷幄暗

廣室は陰かげり 帷幄は暗くらく

房櫺虛兮風泠泠

房櫺は虚しく 風は泠泠たり

感帷裳兮發紅羅

帷裳を感かかして紅羅を發ひらけ

紛綵繚兮紈素聲

紛として綵繚たり紈素の聲

神眇眇兮密覩處

神は眇眇たり密かに覩うかなる處

君不御兮誰爲榮

君の御せざれば誰か榮と爲さん

俯視兮丹墀

俯して丹墀を視

思君兮履綦

君が履綦を思

仰視兮雲屋

仰いで雲屋を視

雙涕兮橫流

雙涕 横はしまに流る

顧左右兮和顏

左右を顧みて顔を和やわらげ

酌羽觴兮銷憂

羽觴を酌みて憂いを銷くす

惟人生兮一世

惟えば人一世に生くるや

忽一過兮若浮

忽ち一たび過ぎて浮ぶが若し

已獨享兮高明

已に獨り高明を享けたれば

處生民兮極休

生民に處りて休を極めり

勉虞精兮極樂

勉めて精を虞たのませて樂しみを極むれ

ば

與福祿兮無期

福祿と與にすること期無し

綠衣兮白華注④

綠衣と白華と

自古兮有之

古自これり之有り

班婕妤のこの賦には、「高殿」「廣厦」という語は使用されていらない。しかし、この賦にうたわれている「房櫺は虚しく風は泠泠たり」、「仰いで雲屋を視る」という句の傍線を引いた語は「情詩」にみられるものである。又、何よりも、班婕妤は、それが彼女の實作であるかどうかは問題がある注⑤としても、この賦と同時に製作されたとされる、後世多くの模擬作品を生んだ「怨歌行」（文選卷二七）の作者、しかも女流詩人として有名であり、徐幹が、彼女のこの賦を知っていたであろうことは、想像に難くない。もっとも、「情詩」の「高殿」「廣厦」が宮城のそれであるかどうかはわからないが。

要するにいいたいことは、開頭の二句は、單なる場所と

しての「高殿」「廣厦」を配置したというに止まらず、班婕妤の「自傷悼賦」にうたわれているような悲劇を孕んだ舞臺として提出されているのではないか、ということである。つまり、「鑪薰」以下の物の賦的修辭による句が、このような物の、例えば「鑪薰闔じて用いず」という、正常ならざる状態にあることを描寫することにより、「君行きて殊えて返らず、我が飾り誰が爲にか榮んなる」という、返つて來ぬ男を待ちわびる孤獨な女の悲しみを、具體的に敘述する役割を荷っているのに對して、開頭二句の情況設定は、場面が正常ならざる雰圍氣を胚胎している、ということを暗示しているのである。

右の如く分析すると、「高殿」「廣厦」の聯に續く「微風闔闔に起り」の句と共に、「落日階庭を照らす」という句は、單に夕ぐれ的情景を點描したというに止まらないと看取される。やがて沈みゆくであろう「落日」に照らし出されるべきはしの前庭は、孤獨にうちひしがれた女性の悲哀を浮かび上がらせる情景として、いい換えれば、この女性のかくの如き心情の投影、心象風景として詠ぜられている

魏・晉詩における「夕日」について（森）

と理解すべきである。

「落日階庭を照らす」という表現は、今日からみれば月並な句であるが、當時にあっては、「明月清景澄み 列宿正に參差たり」（曹植・公譙詩・文選卷二十）、「月出でて園中を照らし 珍木鬱として蒼蒼たり」（劉楨・公譙詩・文選卷二十）などにみられる月光に照らし出される光景とは、また異つた感情がこめられていたにちがいない。

魏の時代の他の例は、どうであろうか。この時代には、「夕日」を意味する語が詩に現われるのは、まだ實に少ないのであるが、王粲の「七哀詩・其二」（文選卷二三）に、次のような例をみることができる。

荊蠻非我鄉	荊蠻は我が郷に非ず
何爲久滯淫	何爲れぞ久しく滯淫らん
方舟溯大江	方舟もて大江を溯れば
日暮愁我心	日暮 我が心を愁えしむ
山崗有餘暎	山崗に餘暎有り



巖阿增重陰 巖阿 重陰を増す

狐狸馳赴穴 狐狸 馳せて穴に赴き

飛鳥翔故林 飛鳥 故林に翔ける

流波激清響 流波 清響を激し

猴猿臨岸吟 猴猿 岸に臨んで吟ず

迅風拂袂袂 迅風 袂袂を拂い

白露霑衣襟 白露 衣襟を霑す

獨夜不能寐 獨夜 寐ぬる能わず

攝衣起撫琴 衣を攝り 起きて琴を撫す

絲桐感人情 絲桐 人の情に感じ

爲我發悲音 我が爲に悲音を發す

羈旅無終極 羈旅 終極無し

憂思壯難任 憂思 壯として任せ難し

王粲のこの詩中には、直接「夕日」を指す語は、現われていない。しかし、「山崗に餘暎有り 巖阿重陰を増す」という聯の「餘暎」は、明らかに「夕日」の殘光を意味する。この二句について、小川環樹氏は、「山岡（崗に同じ

——引用者）は丘陵です。『餘暎（暎に同じ——引用者）有り』は夕ばえ、夕日の殘光であります。それがあたっている。巖阿、阿というのは角（かど）、すみです。岩石が出ばったところやひっこんだところがある。そこへ『重陰を増す』というのは、日がだんだん落ちていきますと、山の下のほうからだんだん暗くなっていく。重陰を増すというのは、そういうことだと思えます。』（『朝日セミナー』24號）と説明されている。

さて、王粲のこの詩が、如何に「知的操作」の「緻密な構成」によつて造形されているかは、伊藤正文氏の「王粲詩論考」（中國文學報第二十冊所收）に詳述されているので、ここでは、「山崗に餘暎有り」の聯が、作者王粲にとって如何なるものとして眼に映じたか、ということに就き若干述べてみたい。

王粲のこの詩を論じる人が、たいてい暫くは筆を惜まず、そのすばらしさについて論及するこの二句の優れる所以は、従前の詩にはみられない自然描寫の細緻な寫實性にあるようだが、この句の特色について、更に注意しなければなら

ないのは、まだ萌芽状態であるとはいえ、この時代以前にはおそらく見出し得ない、「夕日」を自然の美しい光景として認識し鑑賞しようとする態度が窺われることである。

勿論、この二句には、劉宋の謝靈運の

時竟夕澄霽 時竟り 夕は澄み霽れ  
雲歸日西馳 雲歸り 日は西に馳す  
密林含餘清 密林 餘清を含み  
遠峯隱半規 遠峯 半規を隠す

(遊南亭・文選卷二二)

や、同じく劉宋の謝莊の

夕天霽晚氣 夕天 晚氣霽れ  
輕霞澄暮陰 輕霞 暮陰澄む  
微風清幽幌 微風 幽幌を清くし  
餘日照青林 餘日 青林を照らす

(北宅祕園・古詩紀・宋二)

魏・晉詩における「夕日」について(森)

にみられるような、夕ばれの澄み渡った自然の中に鑑賞される「夕日」の美に、純粹に陶醉しようとする態度はみられないし、あるいは、陳の陰鏗の

棟裡歸雲白 棟裡 歸雲白く  
窓外落暉紅 窓外 落暉紅し

(開善寺・古詩紀・陳二)

や、同じく陳の江總の

翠觀迎斜照 翠觀 斜照を迎え  
丹樓望落潮 丹樓 落潮を望む

(侍宴玄武觀・古詩紀・陳八)

の句にみられる如き、「夕日」の赤という色彩のあざやかさを視覚的にとらえるようなものではない。王粲の「七哀詩」が、「羈旅」における「獨夜」の「憂思」を一篇の主題としていことから考えて、なお「日暮我が心を愁えし

む」という詩人の胸中にわだかまる、たそがれ時から夜へかけて一層かもしだされる悲愁の心象風景としてもうたわれている。

だがしかし、それにしても、この二句は、既に一章のところでみた楚辭にみられるような、「夕日」を移行性においてのみとらえる（この點については更に後述）のとはちがって、いわば一種の靜止狀態、繪畫的な様相（このことは、「情詩」の「落日」の句についてもいえる）を帯びてうたわれており、そこには、「夕日」を美しいものとする認識が働らき、「夕日」を鑑賞しようとする志向が垣間みられるのである。

### 三

吉川幸次郎氏は、「新しい夕陽」（吉川幸次郎全集第二十卷所收）と題する文章の中で、詩經、楚辭には「夕陽」は全くなく、「漢の『古詩十九首』にも夕陽は現れない」と述べられた後、「三國六朝に至って、三世紀の哲學者阮籍がほろびゆく王朝の運命をいたんで、

灼灼西顏日 灼灼と西に顔るる日

餘光照我衣 餘光 我が衣を照らす

と比喻するのが、夕陽をいう詩の古い例として、かろうじて思いうかぶ。（○點引用者）と述べられている。この章では、比喻乃至象徴としての「夕日」について先ず述べ、それから表現上の問題について少々言及してみたい。

次に示す詩は、晉の陸機の「擬東城一何高」（文選卷三十）と題する詩である。

西山何其峻 西山 何ぞ其れ峻なる

曾曲鬱崔嵬 曾曲 鬱として崔嵬たり

零露彌天墜 零露は天に彌くして墜ち

蕙葉憑林衰 蕙葉は林に憑りて衰う

寒暑相因襲 寒暑 相因襲し

時逝忽如頽 時の逝くこと忽ちにして頽るるが如し

三閭結飛轡 三閭は飛轡を結び

大壑嗟落暉 大壑は落暉を嗟く

曷爲牽世務 曷爲れぞ世務に牽かれ

中心若有違 中心 違ふこと有るが若き

京洛多妖麗 京洛には妖麗多く

玉顏伴瓊漿 玉顏 瓊漿に伴し

閑夜撫鳴琴 閑夜 鳴琴を撫せば

惠音清且悲 惠音 清くして且つ悲し

長歌赴促節 長歌 促節に赴き

哀響逐高徽 哀響 高徽を逐う

一唱萬夫歎 一唱すれば萬夫歎じ

再唱梁塵飛 再唱すれば梁塵飛ぶ

思爲河曲鳥 思う 河曲の鳥と爲り

雙遊豐水湄 雙遊して豐水の湄に遊ばんことを

全篇引用したが、この論考で特に問題になるのは、「寒

暑相因襲し 時の逝くこと忽ちにして頽るるが如し 三閭

は飛轡を結び 大耋は落暉を嗟く」の四句である。この部

分の語句について少し説明を加えておこう。

「三閭」というのは、楚辭の「漁父」の冒頭に「屈原既に放たれ、江潭に遊び、行くゆく澤畔に吟ず。顔色憔悴し、

魏・晉詩における「夕日」について（森）

形容枯槁せり。漁父見て之に問う。曰く『子は三閭大夫に非ずや』。……」とある「三閭大夫」屈原のことであり、

「飛轡を結ぶ」の語は、李善が注に引く如く、「余が馬を咸池に飲みずかい 余が轡を扶桑に總むすぶ」を踏まえていよう。

次に、「大耋」の語。この語は、『周易』の「離」の卦の「九三。日昃かたむくの離なり。佺ほろぎを鼓ちて歌わざれば、大耋てうの嗟なげきあらん。凶なり。」（訓讀は、高田眞治氏・後藤基巳氏譯『易經上』（岩波文庫）に基づく。「離」の卦の右に引用した箇所について、高田・後藤兩氏の譯では、次のように述べられている。

九三は下卦の極、その明やいがまさに盡きんとする時であるから、たとえていえば、日がすでに西に傾むいた残りの明あきるさ、人生に即していえば衰餘の老年である。しかし生者必滅の道理を悟れば、佺ほろぎ（酒を入れる瓦器）を叩いて歌いつつ、残りの壽命を樂しむがよい。それができなければ、やがてはいたずらに大耋だいてう（八十歳の老人）の老衰を嗟くことになって凶である。」（二六五頁。○點引用者）

この譯を讀めば、「落暉」の語について、それが如何なる意味をもつてうたわれているか、もはや何も説明する必要はなさそうである。つまり「夕日」を人間の老衰の象徴と看做すわけである。

あるいは別に、「寒暑相因襲し 時の逝くこと忽ちにして類るるが如し」と合せ考えて、時の短促の象徴としてとらえられ、うたわれていると看做すこともできる。陸機が模擬した「古詩十九首・其十二」(文選卷二九。今本は、東城高且長の句で始まる)の「四時更<sub>レ</sub>も變化し 歲暮一に何ぞ速やかなる」の聯も、右の判斷の參考になるであろう。又、五臣・劉良の「大老の人、日の暮れを嗟嘆して其の時を惜むを言う」という注釋は、後者の解釋に傾むいていると思われる。

ただ、人間の老衰と時の短促とは、相互に密接に關連しているから、分離して考えないで、その兩方の意味を含めて考えた方がよいのかも知れない。が、いづれにしても、右のような象徴として「落暉」はうたわれており、「落暉」を含む二句は、屈原は遠遊して長生を求めたが(劉

良は、「飛轡を結ぶというは將に遠遊して長生を求めんとするを言う」と解している)、結局は徒勞であり、「大塋」の人の如く、時が過ぎ老いさらばえてゆくのを空しく嗟くばかりである、という解釋になろうか。

右のような象徴乃至比喩としての「夕日」の例は他に

促促薄暮景 促促たる薄暮の景

壘壘鮮克禁 壘壘として克く禁ずること鮮し

(陸機・豫章行・文選卷二八)

如彼墜景 彼の墜景の如く

曾不可振 曾<sub>すなわ</sub>ち振<sub>あ</sub>ぐ可からず

(同・答何長淵・其三・文選卷二四)

功業未及建 功業 未だ建つるに及ばざるに

夕陽忽西流 夕陽 忽ち西に流る

(劉琨・重贈盧諶・文選卷二五)

などを指摘することができる。「薄暮景」、「夕陽」について、李善注にそれぞれ、「景の薄暮は人の將に老いんとするに喩うる也」、「夕陽の西に流るるは將に老いんとする人に喩うる也」とある如く、人間の老衰の比喩としてうたわれており、「墜景」の句については、五臣・呂向の注に「漢室の衰微すること落日の景の如く、則ち振げて起こす可からざるを言う也」とある。

更に、人間の老衰は押しつめれば死に到るわけであるが、

生若朝風 生は朝風の若く

死猶絕景 死は猶お絶景のごとし

(陸機・贈弟士龍十章・其七・古詩紀・晉五)

という句に明示されている如く、死の象徴としてもとらえられている。

ところで、右に示した句の中、「夕陽」の語を除いた、

「薄暮景」「墜景」及び「絶景」の「景」の字は、元來「光」の義であつて(「景、光也」説文解字・七篇上)、「日」のそれ

魏・晉詩における「夕日」について(森)

ではない。つまり「夕景」は、「夕日」そのものをいうのではなく、「夕日」の光であつた。呂向が、「墜景」の注に「落日の景」と、「落日」と「景」の字とをわざわざ記しているのも、このことを意識してのことであろう。

私は、しかし、「夕景」が、正確には、「夕日」の光をいう語であつても、「夕日」と殆ど同義に使用されていると考えるのだが、そもそも、この時代に、「夕日」をいう語は、どういう形で表わされているのであろうか。私の調査したところでは、「夕日」という語が使用されているのは、「夕景」を含めて計算すると十例あるが、今、既に引用したものを除いた残りの例を示すと次の如くである。<sup>注⑥</sup>

(資料は、丁福保編纂「全漢三國晉南北朝詩」によつた)。

虞淵引絶景。 虞淵 絶景を引き

四節逝若飛 四節 逝くこと飛ぶが若し

(陸機・擬庭中有奇樹)

傾景。 傾景 儵かに墜ち

夕不存罷

夕に罷むるに存らず

(陸雲・答兄平原)

沈曦含輝

沈曦 輝きを含み

芳烈如蘭

芳烈 蘭の如し

(同・失題八章・其五)

凋華振彩

凋華 彩を振り

墜景增灼

墜景 灼きを増す

(郭璞・與王使君)

落日出門前

落日 門前を出で

瞻矚見子度

瞻矚せんとくして子の度きまるを見る

(子夜歌四二首・其二)

以上、右に示した通り、その多くは「落日」であり、「落日」の形の語は、「子夜歌」の「落日」のわずか一例のみである。

魏代にもどってこのことを調べてみると、徐幹の「情詩」の「落日」と、阮籍の「詠懷詩」の「西頽日」各一例、合計二例のみで、「夕日」を意味する語が使用されることさえほんのわずかなのである。

このように、魏・晉どちらの時代も、「落日」の形の語は實に僅少なのであるが、これはどうしてなのであろうか。次に、この點について述べることにする。

左に掲げる詩は、王粲の「從軍詩・其三」(文選卷二七)である。

從軍征遐路

軍に従いて遐路を征き

討彼東南夷

彼の東南の夷を討たんとす

方舟順廣川

方舟もて廣川に順い

薄暮未安坻

薄暮 未だ抵に安んぜず

白日半西山

白日 西山に半ばし

桑梓有餘暉

桑梓に餘暉有り

蟋蟀夾岸鳴

蟋蟀 岸を夾んで鳴き

孤鳥翩翩飛

孤鳥 翩翩として飛ぶ

征夫心多懷 征夫 心は懷い多く

惻愴令吾悲 惻愴として吾れをして悲しましむ

下船登高防 船を下りて高防に登れば

草露霑我衣 草露 我が衣を霑す

廻身赴牀寢 身を廻らして牀に赴ひきて寝ねんとす

るも

此愁當告誰 此の愁 當に誰にか告ぐべき

身服干戈事 身は干戈の事に服すれば

豈得念所私 豈に私わたくしする所を念うを得んや

卽戎有授命 戎に卽けば授命有り

茲理不可違 茲の理 違う可からず

この詩の「白日西山に半ばし 桑梓に餘暉有り」は、日が西の山に半ば沈みかかり、桑梓の樹木にその餘光が残っている、ということをやうたっており、「白日」の句全體で、「夕日」の光景を詠じているわけである。

このことから類推できるのは、熟語として「夕日」を意味する「落日」の形の語が、魏・晉にごく少數であるのは、

魏・晉詩における「夕日」について（森）

「白日」という語の、この句に示されるような表現が、「落日」の形の「夕日」の役割を果たしていたからではないか、ということである。このことをはっきりさせる爲に、魏・晉及び宋・南齊・梁・陳各時代の右の如き「白日」、及び「落日」の語の使用數を表示すると、多少の遺漏があるかも知れないが、次の如くである。（資料は、やはり丁福保編纂「全漢三國晉南北朝詩」である）。

落日	白日	魏	晉	宋	南齊	梁	陳
2	15						
1	10						
10	4						
4	2						
39	8						
6	1 <sup>注⑦</sup>						

この表を看れば、魏・晉は、「落日」に較べ「白日」の使用數がはるかに多いこと（宋以下はその逆になっている）、又、宋以下の各時代に較べて「落日」の數は少ないのに對し、「白日」の方は、ずっと多いことがわかる。

右の統計的事實より想像して、魏・晉のどちらの時代も、例えば「落日」（六朝を通じてこの語の使用がもっとも頻



繁である」というような「く日」の形の語はまだ定着せず、「夕日」を表現する場合、「白日」の語を、それによって「夕日」を表わすところの他の語（西山）などと結びつけることで充足し、「く日」の形の語を殆ど必要としなかったのではないだろうか。晉代に、熟語として「夕日」という語が、「く日」という形をとらず、多く「く景」という形をとったのも、そのことと関連しているのではないか。<sup>注⑥</sup>

なお、右述した如き句全體で「夕日」を表現する方法は、ひとり「白日」の語のみによるのではなく、例えば、「日既に逝けり西に藏る」更に蘭室洞房に會す（曹植・妾薄命・藝文類聚卷四一・樂部一・論樂）、「日の落つるは竟り有るに似たり 時の逝くは恆に催すが若し」（陸機・析楊柳行・樂府詩集卷三七）という句にみられる「日」という語によっても表現されている、ということを附け加えておく。

#### 四

ところで、右に述べたことは、一體何を意味しているのであろうか。この點を考える爲には、魏・晉代の「白日」

がどのようなうたわれているかを、具體的にみても必要がある。以下「白日」の例をいくつか左に掲げると次の如くである。

1 白日西南馳  
光景不可攀

白日 西南に馳せ  
光景 攀む可からず  
（魏・曹植・名都篇・文選卷二二）

2 白日忽西幽  
朝陽不再盛

朝陽 再び盛んならず  
白日 忽ち西に幽る  
（魏・阮籍・詠懷詩・其三三・古詩紀・魏九）

3 白日已西傾  
忝荷既過任

忝荷 既に任に過ぎ  
白日 已に西に傾く  
（晉・張華・答何劭・其二・文選卷二四）

4 白日入西津  
長流無舍逝

長流 逝き舍むること無く  
白日 西津に入る

(晉・王浚・從幸洛水餞王公歸國詩・古詩紀・晉三)

5 白日急兮西頽 白日 急に西に頽れ

守長夜兮思君 長夜を守りて君を思う

(魏・文帝・寡婦・古詩紀・魏二)

彷徨四顧望 彷徨して四に顧望すれば

6 白日入西山 白日 西山に入る

(晉・楊方・合歡詩・其三・玉臺新詠卷三)

右の「白日」の句のうち、1・2・3の例が、時間の推移乃至老いの象徴としてうたわれていることは、改めて言を費すまでもないであろう。4の例は、詩題にいう王公が國へ歸還することを、「長流」と共に、「白日」の推移によって表わし、5・6の例については、それが夜になるのをいうのはいうまでもないが、5の例は、詩題にいう「寡婦」の孤獨の身の悲哀(この詩には「序」があり、それに「友人阮元瑜早く亡す、其の妻の孤寡なるを傷み、爲に此の詩を作る」とある)を一層感じさせる夜のおとずれが、

魏・晉詩における「夕日」について(森)

又6の例は、待てども「佳人」は來ず(「白日」の句に續いて「佳人の來るを靚す 但だ飛鳥の還るを見るのみ」とある)、空しく時間が過ぎ、夜がおとずれようとしているということが、それぞれうたわれている。

以上、右掲した「白日」の例が示す如く、「白日」の語が「夕日」を表わす場合、それは、時間の推移を表現するものであり、その際、その推移に對して悲しみの感情が託されている(このことは、「日」という語を使用している場合も、いえる)。もっとも、潘岳の「在懷縣作・其一」(文選卷二六)に「朝に慶雲の興らんことを想い 夕に白日の移らんことを遅つ」とあって、「白日」の移行することに必ずしも悲哀の感情はこめられておらず、ただ暑い日中が過ぎ去り、早く「白日」が西に移りゆくのを待ち望んでいる、というふうな詠ぜられている。これは、しかし例外というべきである。さて、右にみた通り、王粲の「從軍詩」の例を除いた「白日」の句の全てが、「夕日」の光景を描くことそれ自体を目的としているわけではないのであるが、ここで想起しなければならないのは、右述した「白日」の移行によっ

て時間の推移を表わすという發想は、その淵源を尋ねれば、實は楚辭にあるということである。

楚辭については、既に、(1)「日は忽忽として其れ將に暮れんとす」(離騷)、(2)「白日晼晚として其れ將に入らんとす」(九辯・其七)、(3)「日は杳杳として以て西に頽る」(九歎・遠逝)、(4)「日は噉噉として其れ西に舍らんとす」(九歎・遠遊)などという句がみられることを示した。ところで、これら四つの句は、日が沈むという表面の意味の裏に、どのような意味を含んでいるのであろうか。これを考える手掛りとして、漢の王逸が、これらの句に如何なる注釋を施していたかをみることにする。

(1)の場合

言己誠欲少留於君之省閤以須政教、日又忽去、時將欲暮、年歲且盡、言己衰老也

(言うところは己は誠に君の省閤に少留し以て政教を須たんと欲するに、日は又忽ち去り、時は將に暮れんと欲し、年歲は且に盡きんとするなり。己の衰老する

を言う也)

(2)の場合

年時欲暮、才力衰也

(年時暮れんと欲して、才力衰うる也)

(3)の場合

言日已西頽、年歲卒盡、道路長遠、不得復還、憂心迫窘、無所舒志也

(言うところは日は已に西に頽れ、年歲は卒え盡き、道路長遠にして、復た還るを得ず、憂心迫窘し、志を舒ぶる所無き也)

(4)の場合

言日噉噉西下、將舍入太陰之中、其餘氣、猶尙炎炎、而顧欲還也、以言己年亦老暮、亦思還返故鄉也

(言うところは日は噉噉として西に下り、將に太陰の中に舍り入らんとし、其餘氣、猶尙炎炎たり、而し

て顧みて還らんと欲する也。以て己は年亦た老い暮れ、亦た故郷に還返せんことを思うを言う也)

右の注釋によれば、日が西に沈むというのは、年の暮れること、又老いゆくことを意味していることになる。勿論、年の暮れることと老いゆくことは相關關係にある。

とすると、楚辭におけるこれらの句は、例えば、「老は冉冉として其れ將に至らんとす」(離騷)、あるいは「歳は留留として其れ頽るるが若く、時も亦た冉冉として將に至らんとす」(九章・悲回風)などと、いわんとするところは、結局殆ど同じであると判斷しても差しつかえないと思われる。日が沈むという表現によって主張しようと意圖したのは、後者の句の如き事柄に他ならないからである。

かくて、「夕日」を時間の推移と結びつけてうたう、「夕日」を老衰や時間の短促の象徴としてうたうという發想の根本において、魏・晉の「夕日」は、楚辭的な觀念から餘り脱してはいないといえるのである。

なるほど、既に述べた如く、王粲の「山崗に餘暎有り

魏・晉詩における「夕日」について(森)

巖阿重陰を増す」(七哀詩)とか「白日西山に半ばし 桑梓に餘暎有り」(從軍詩)にみられるように、「夕日」を自然の對象物として鑑賞しようとする態度がきざしている。

しかし、それはあくまで萌芽狀態としてそうなのであって、王粲のこれらの詩にしても、詩人の關心は、既に憂愁な夜のもの思いに移ってしまっており、「餘暎」「餘暎」の句も、この意味においては、夜へのいわば橋渡しとしてうたわれている側面が強い。だから、特別に「夕日」の光景に強い關心を示して、全篇夕ぐれ時をうたう南齊の謝朓<sup>注⑨</sup>のような場合は別にするとしても、例えば梁の沈約の「登玄暢樓」(古詩紀・梁一〇)と題する詩

危峯帶北阜 危峯 北阜に帶び

高頂出南岑 高頂 南岑より出づ

中有陵風樹 中に風を陵ぐ樹有り

廻望川之陰 川の陰を廻望す

岸險每増減 岸は險しく毎に増減し

湍平互淺深 湍は平らかにして互に淺深あり

水流本三派 水流 本三派なり

臺高乃四臨 臺高うして乃ち四に臨む

上有離群客 上に離群の客有り

客有慕歸心 客に慕歸の心有り

落暉映長浦 落暉 長浦に映じ

煥景燭中潯 煥景 中潯に燭く

雲生嶺乍黑 雲生じて嶺乍ち黒く

日下溪半陰 日下りて溪半ば陰る

信美非吾土 信に美なるも吾が土に非ず

何事不抽簪 何事ぞ簪を抽かざるは

にうたわれている「落暉長浦に映じ 煥景中潯に燭く 雲

生じて嶺乍ち黒く 日下りて溪半ば陰る」という句にみら

れる如き、「夕日」が沈むままにやがて夕闇のとばりが降

りてくるという黄昏の光景にじっと思いを寄せようとする

態度などは、みられないのである。このことは、「夕日」

をいう語に限定せず、杳をたそがれ時をいう語に擴大して

も、

日夕陰雲起 日夕 陰雲起り

登城望洪波 城に登りて洪波を望む

(潘岳・在懷縣作・其二・文選卷二六)

日暮天無雲 日暮れて天に雲無く

春風扇微和 春風 微和を扇ぐ

(陶淵明・擬古詩・文選卷三十)

など、「日夕」や「日暮」の句は、夕ぐれ時を點描するものであつても、夕ぐれの光景それ自體を目的として描くものではないということからも首肯されることである。

魏・晉代には、例えば「白日」という語の使用にみられる如く、移行の相において「夕日」を表現する方法が、相當大きな比重を占め、なお楚辭の影響が色濃く投影している。けれども、熟語として「夕日」あるいはその光を表わす語が使用され始めたことに示される如く、楚辭とは異つた「夕日」に對する認識形態、「夕日」を一種の靜的な狀

態の下におき、鑑賞しようとする態度の芽ばえがうかがわれる。この意味では、魏・晉代は、楚辭的な「夕日」からの離脱の過程の始まりであつたとみることができ。

注

① 以下『詩經・國風』については、吉川幸次郎氏注『詩經國風』（岩波詩人選集）による。

② 但し、詩ではないが、『尚書・堯典』に「寅饒納日、平秩西成（納日を寅み饒り、西成を平秩せしむ）」とある。清水茂氏の指教による。

③ 訓讀は、輿膳宏氏譯『文心雕龍』（世界古典文學全集25筑摩書房）による。

④ 「綠衣」は、詩經・邶風の篇名で、その序に「綠衣、衛莊姜傷己也、妾上僭、夫人失位、而作是詩也」とある。「白華」は、詩經・小雅・魚藻之什の篇名。その序に「白華、周人刺幽后也、幽王取申女以爲后、又得褒姒而黜申后、故下國化之、以妾爲妻、以嬖代宗、而王弗能治、周人爲之作是詩也」とある。どちらも、妾の爲に正夫人が退けられたのを諷刺したもの。

⑤ 狩野直喜氏は、「兩漢學術考」において、「怨歌行」は、「全く六朝人の體なり」と述べられている。

⑥ 但し、例えば「浮景忽西沈」（張載・七哀詩・其二）の句にみられる「浮景」の如き、これだけでは必ずしも「夕日」の光を意味しない語は入っていない。

魏・晉詩における「夕日」について（森）

⑦ 各時代の「白日」の使用例を以下に示す（本文に引用したものは除く）。

○魏の例

1 白日晚晚忽西傾 霜露慘慘塗階庭（明帝・燕歌行）

（以下「白日」の語は○○で表記する）

2 原野何蕭條 ○○忽西匿（曹植・贈白馬王彪・其四）

3 驚風飄 ○○ 忽然歸西山（同・贈徐幹）

4 驚風飄 ○○ 光景馳西流（同・樂府引）

5 風颺揚塵起 ○○忽已冥（王粲・雜詩）

6 ○○已西邁 歡樂忽忘歸（同・雜詩四首・其二）

7 ○○入虞淵 懸車息駟馬（繆襲・挽歌詩）

8 ○○沒 時晦冥（同・戰策陽）

9 娛樂未終極 ○○忽蹉跎（阮籍・詠懷詩・其五）

10 ○○類林中 翩翾零跡側（同・同・其七一）

11 ○○隕隅谷 一夕不再朝（同・同・其八二）

○晉の例

1 嘉宴既終 ○○西歸（何劭・洛水祖王公應詔）

2 ○○既沒明燈輝 夜禽赴林匹鳥棲（陸機・燕歌行）

3 昃步不能移 ○○奄桑榆（李頤・經渦跡作）

4 ○○淪西阿 素月出東嶺（陶淵明・雜詩十二首・其二）

5 春遊誠可樂 感此 ○○傾（張駿・東門行）

6 驚風急素柯 ○○漸微濛（子夜歌・其三二）

○宋の例

- 1 ○○傾晚照 弦月升初光 (孝武帝・七夕・其二)  
 2 短生旅長世 恆覺○○欽 (謝靈運・豫章行)  
 3 嚴風亂山起 ○○欲還次 (鮑照・冬日)  
 4 君才定何如 ○○下爭暉 (吳邁遠・長別離)  
 ○南齊の例

- 1 觴流○○下 吹溢景雲滋 (謝朓・元會曲)  
 2 ○○麗飛甍 參差皆可見 (同・晚登三山還望京邑)  
 ○梁の例

- 1 陰陰色晚 ○○西移 (昭明太子・示徐州弟・其八)  
 2 ○○西落楊柳垂 含情弄態兩相知 (簡文帝・東飛伯勞歌・

其二)

- 3 香風起 ○○低 (同・採蓮曲)  
 4 歡樂未窮已 ○○下西山 (同・遊人)  
 5 千里何蕭條 ○○隱寒樹 (江淹・雜體詩・劉太尉琨)  
 6 曲中人未取 誰堪○○ (庾肩吾・詠美人)  
 7 ○○隱城樓 勁風掃寒木 (吳均・與柳惔相贈答・其四)  
 8 飛狐○○晚 瀚海愁雲生 (虞羲・詠霍將軍北伐)

○陳の例

- 鷺嶽青松繞 鷄峰○○沈 (後主・同江僕射遊嶺山棲霞寺)

- ⑧ なお、晉の時代の数少ない「夕日」の使用例のたいていが、象徴乃至比喩としてうたわれているのだが、晉代以後の六朝時代に「夕日」を「夕景」で表現する場合、「夕景」の語は、例えば

東隅誠已謝 東隅 誠に已に謝し  
 西景逝不留 西景 逝きて留まらず  
 (宋・傅亮・奉迎大駕道路賦詩)

垂景迫連桑 垂景 連桑に迫り  
 思仙慕雲崙 思仙 雲崙を慕う  
 (梁・沈約・奉和竟陵王藥名)

憑酒竟未悅 酒に憑るも竟に未だ悦ばず  
 半景方自歎 半景 方に自ら歎ず  
 (梁・江淹・採石上菖蒲)

など、時の短促や老いの象徴としてうたわれており、このことは、晉代に「夕景」といういい方が使用されていたことと無関係ではないであろう。

- ⑨ 謝朓と「夕日」の關係については、輿膳宏氏「謝朓詩の抒情」(東方學第三十九輯所收)を参照。